

《審査委員》

審査委員長	渡部 和生	建築家	早川 博明	元 福島県立美術館長
	手塚 由比	建築家	木下 庸子	建築家・工学院大学名誉教授
	岡部 明子	東京大学大学院教授	矢森 真人	福島民報社会長
	石井 敏	東北工業大学教授		

第39回 福島県建築文化賞 総評

福島県建築文化賞は、昭和57年に創設され、東日本大震災後の2年間及び令和2年度のコロナ禍による中断を挟み本年で39回目を迎える。

今回の応募作品は合計36点で、公共が17点、民間が19点であった。用途別では、福祉・医療施設等が15点と最も多く、次いで庁舎・事務所等が6件、学校教育施設、文化・スポーツ施設等、リゾート・観光・宿泊施設等、商業施設等が各3点、古い建築物の修復が2点、建築物群が1点であった。地域別では、中通り17点、浜通り11点、会津8点となった。特に保育園や認定こども園などの保育施設の応募が多く、共働き世帯の増加など時代のニーズを反映していることが窺える。

一次（書面）審査は8月31日に公開で行われ、各委員が応募書類、図面、写真をもとに評価を行った。審議では、はじめに全員が全体的な感想・評価を述べ、推薦作品を投票した。過半数の票を得た11作品を選定し、その後、得票のあった作品について議論を重ね、現地審査対象として14作品を全会一致で選定した。

二次（現地）審査は10月16日から18日までの3日間にわたって実施し、現地で応募者からの説明を受け質疑応答を行った。後日、各審査委員が正賞、準賞、優秀賞候補として5点、特別部門賞候補として3点、復興賞候補として3点を選び、選定理由と全作品に対するコメントを提出した。

最終審査は11月21日に全審査委員が出席して行った。全員が現地審査を通じた印象と評価の観点について述べた後、授賞作品の選考に入り、事前投票の集計結果と各審査委員の推薦理由をもとに、建築の意匠・機能性、周辺環境との調和、建築の動機や目的、震災復興に対する貢献度など、賞の多面的な評価基準に照らして議論を重ねた。各作品は規模、用途、計画・建設条件等が異なり、賞の区分による評価の視点も異なることから、選考には困難が伴ったが、本賞の趣旨、評価基準に照らして、最終的に全会一致で、下記のとおり正賞1点、準賞1点、優秀賞3点、特別部門賞3点、復興賞3点を選定した。

【正賞】

『みなみあいづ森と木の情報・活動ステーション きとね』は、町土の90%以上を森林が占め、林業を核とした地域振興に取り組んできた南会津町が、町産材の価値を高めるとともに、地域経済の活性化や林業等に関する情報発信などを目的に整備した交流拠点施設である。地場の製材所で加工した木材を、縦ログの基壇の上に重ね梁として載せて広々とした空間を実現している。また、これまで培ってきた構法を駆使して木材を使いこなした建物となっており、各地で南会津産木材の評価が高まり、需要が伸びるようプロモーションするなど今後の活動が期待される。地元の林業、建設、建築に携わる人々の知識や経験、技術を結集し、伐採から加工、建方まで一貫して町内でやり遂げたことは素晴らしい価値があり、南会津町の熱い意気込みが伝わってくる作品で、建築文化賞正賞にふさわしい。

【準賞】

『コミュニティサポートセンター アルペロベッコ』は、障がい者の住まいと活動の場、地域住民のためのシェアスペースを持ち、緊急時には避難拠点にもなる地域の障がい者の生活支援拠点である。方形屋根を連結させた住宅群のようなユニークな外観が、周囲の緑深い自然環境と調和して、安らぎと親近感をもたらしている。山型の木造垂木が印象的な施設内部は、リビングルームを囲んで個室が配置され、このリビングルームがさらに大きなダイニングルームに繋がることで、廊下のない平面が実現されている。多くの時間を室内で過ごす障がい者にとって、木の温かみが十分に感じられる快適な住空間を実現しており、入居者に優しい福祉施設として好感が持てる。

【優秀賞】

『ゼノアック本館』は、国内外からの訪問客を迎え、事業内容を公開し交流を広める上での迎賓機能や展示機能を合わせ持つ開かれた社屋である。外観は石貼りなどが効果的に使われ、プロポーションも良く、落ち着いた佇まいを見せている。エントランスホールやレセプション室などの各室は、木の典雅な質感を保った端正な室内空間と調度品で統一され、上質な建築デザインとなっている。国内外からの訪問客を迎える空間としてふさわしい風格のある建築である。

『てぞーろ保育園』は、福島市のシンボルである信夫山の北側に密集する住宅地にあり、曲面の外周壁で囲んだモダンな箱形のひときわ特徴的な外観が印象的である。内部空間は、児童施設の運営プログラムと立体的なプロムナード動線が上手に組み合わせられ、職員による管理や園児の生活が有機的かつ効率よく運営できる計画となっている。子供たちが楽しむことのできるスペースが至るところに造り込まれ、遊びと生活、学習の要素が高いレベルで融合されている。

『やがわせミクストコミュニティ enva』は、地域コミュニティの再生を目指し、設計者の事務所の隣に建つ築50年を超える古い空き店舗をカフェ及び多目的スペースとして改修した建築物である。2階はサッシを残して曲面パネルシャッターを設置したテラス風の空間となっており、実に気持ちが良い。人と人の縁が繋がる場を創ることで、地域をより良くしていこうとする活動は評価に値する。運営内容も住民参加が期待され、このような改修の連鎖が街並みづくりへ大きく貢献するであろう。

【特別部門賞】

『二本松市歴史観光施設「にほんまつ城報館」』は、国指定史跡二本松城跡へのアプローチ空間であり、歴史への理解を深めるための観光拠点施設でもある。二本松の古い町並みや今日に至るまちの成り立ちを十分に調査・研究しながら計画され、都市デザイン的手法を重視し、ランドスケープと建築の調和が図られている。二本松城跡へ向かう来訪者のゲートであると同時に、市の歴史・文化に関する基礎的な情報を提供する資料館としての機能を十分に果たしている。

『母畑温泉 八幡屋 帰郷邸』は、昔ながらの大規模温泉旅館に現代のニーズに合わせた食事処・露天風呂等を増築したものである。石川町から産出された天然石をダイナミックに配置して雄大な景観を見せる庭園を造成するなど、町の風土性にも適った味わい深い建築となっている。露天風呂そのものはシンプルながらゆったりと身を投げ出して自然と人工物の融合を五感で感じ取ることができそうで、土木と建築、造園それぞれの技術と感性が織りなす景観を堪能できる。

『三春きたまち蔵』は、座敷蔵、倉庫蔵の2つの土蔵を貸事務所と町内観光案内所として再生・利活用し、併せて公衆トイレを整備した観光情報の発信拠点施設である。古い土蔵の持ち味を大切にしながら、現代のプログラムに生かされるように、さりげなく改修などを行っている。古い歴史の佇まいを持つ中心市街地に残された蔵に光を当て、背後の森林「花の丘公園」の利用と連動しながら、地域コミュニケーションの場としての役割を期待した計画となっている。

【復興賞】

『共生サポートセンター さくらの郷』は、避難指示が解除された富岡町に帰還する住民のために計画した特別養護老人ホームと町民センターである。内部の木質が良い雰囲気、廊下の梁など大きな部材を大胆に使用しているオープンスペースとプライベートの空間が無理なく繋がり、居住者への対応がスムーズである。窓から陽光が差し込み、温かい居住空間を作り出しているこの施設を核に、故郷に帰った人達の交流が深まることを期待したい。

『福島県浪江ひまわり荘』は、東日本大震災により浪江町にあった救護施設を西郷村へ仮設として移し、7年間プレハブでの運営を余儀なくされていた同施設を新たに整備したものである。廊下、食堂、ホールは天井高を上げて高窓をとり、木の構造が見えるようにするなどの工夫がなされている。通路や室内全体にゆとりを持たせ、利用者が健康で安心して長期間の日常生活を送る場として十分に対応可能なメリハリを利かせた設計となっている。

『Smart Wellness Town PEP MOTOMACHI』は、郡山市の医療を長年支えてきた小児科クリニックの移転新築に伴い計画された健康まちづくり推進プロジェクトである。小児科クリニック棟には、図書館のような待合室が配置され、子供たちの居場所となるような診療所となっており、薬局・子育て支援棟では、旧仮設住宅の縦ログ資材を再利用するなどの意欲的な試みを行っている。ロハス広場の名のもとに、地域コミュニケーションの活性化につなげようとした建設の趣旨も意義深い。

現地審査対象となりながら、惜しくも選外となった作品にも、本賞の趣旨に照らしてそれぞれ見どころがあり、授賞作品に劣らぬ評価を得た。

『会津高原 星の郷ホテル』は、町産材を活かした木の温もりが漂うホテルであり、きれいな星と空を意識した仕掛けが随所にあり、宿泊客や広場の利用者を楽しませてくれる。

『ただみ・モノとくらしのミュージアム』は、奥会津の豪雪地帯で営まれてきた人々の暮らしを物語る貴重な民具類が保管され、只見町が誇る博物館施設となることが期待できる。

『JR 常磐線 四ツ倉駅』は、小さな駅舎であるが、細かな配慮をした建物であり、木造の特質を生かし、やわらかい印象の内外観が実現されている。

今回の応募作品は地域コミュニティの核となる施設が多く、いずれも建築主、設計者、施工者のまちづくりに対する熱意が感じられた。子どもたちや地域住民の居場所づくりを計画したもの、利用者に安らぎや潤いを与えてくれるもの、人と人との縁をつなぐものなど地域を支え、これからの地域の未来を創る建築として大いに活用されることを期待したい。

これらの建築は、地域コミュニティの形成や再生、様々な文化活動を生み出す社会的基盤として地域の人々に使われ、時を重ねることで愛情が深められ、より地域に根差した建築となり、やがて生活や風景に溶け込んでいく。その連綿とした積み重ねにより、福島県の建築文化が形づくられていく。

現地審査では、設計、施工、管理・運営のそれぞれの関係者から、作品に込められた思いやエピソードを熱心にお話しいただいた。審査を通じて、建築文化が社会に対して果たす役割について改めて考えさせられた。今回の受賞作品を通じて、県民の皆様も同じ思いを共有していただき、地域の歴史、文化、風土を大事にした建築、地域づくりを進める契機となれば幸いである。

最後に、今回御応募いただいた関係者に対して、審査委員一同深く敬意と謝意を表したい。

審査委員長 渡部 和生